

2016年度第9回セミナー・議事録

1. 日時： 2016年12月21日（水） 18：00～19：00
2. 場所： 富山県立大学環境工学科棟 I-333 地域協働支援室
参加者:13人
3. 講師： アイベック株式会社 相談役 高見貞徳 様
4. 題目： 西洋住居史 一石の文化と木の文化一

5. 報告内容

(1)住居の進歩

旧石器時代に洞窟から原始住居へと移行したことが住まいの始まり。その後は各国、各地域において様々な形式の住居が誕生し、発達した。

(2)中世以降の西洋の住居

建物の所有権は、日本のように各階で分ける横割りが一般的である。一方で、古代ローマでは建物の所有権は縦割りになっており、各室の直上・直下の部屋は同一出資者たちの所有であった。このため、出資者は自分の所有権を明確にするために幅の狭い建物を作るようになった。これは中世以降であれば、イタリア、スペインおよびフランスなどのラテン系の石の文化圏であればどこにでも見られる傾向である。

(3)西洋に石造りの建物が多い理由

講師はかつて、西洋では気候の面から建築用材として使用できる木材が少ないため、石やレンガを使用した建物が多いと考えていた。

しかしながら、石の文化と木の文化(著者 後藤久)を読むと以下のことがわかった。12世紀のロンドンでは大火が相次いで発生した。そこで町は次のような法令を定めた。「各戸は必ず家の境に、厚さ 0.93メートル、高さ 4.88メートルの防火用煉瓦壁を設け、屋根は街路に面して切妻にし、直接防火壁のうえに葺きおろし、瓦葺とすること。」これより、西洋に石造りの建物が多い理由としては、石の家の方が木の家よりも燃えにくいからであると言える。